

水の憧れ

僕は今伊豆の海に来ている。

なぜこんなところにいるかと言ふとおじいちゃんの別荘があるからだ。

おじいちゃんは暑いところや海が異様に好きである。

でもそのおかげで僕は、今、伊豆の海をみながらぼーっとできている。

普段は触ることのできない空気、匂い、暑さ。少し居心地が悪いようで、新鮮な氣もする。

海の波が押し寄せる音と、かすかに蝉の音も聞こえる。

8月下旬。

妹の小学校は夏休みが終わっているが、僕はまだ夏休みだ。

沖縄出身の母は海よりも、海から見える夕日や、地平線がとても好きだと言つ。

そして、太陽が沈んでいくときの美しさ、切なさ、その後暗闇が訪れる静けさ、

母はそんな景色が無性に恋しくなると言つ。

波は寄せては返す。海の水も少し冷たく感じた。

防波堤に続く階段に座つていると、お尻が焼けそうな位暑い。

僕は砂浜に出た。

砂浜の砂はやんわり熱く、歩いていると心地よく感じる」ともある。

少し日を横にやると、浜辺に溜まつた「ゴミ」をショベルカーが片付けている。

先週まで台風などで、この辺も海も荒れていたらしい。

木片などの漂着物が多く散乱している。

ペットボトル、誰かの知らないサンダル、一斗缶など、

砂浜に似つかわしくないものばかり溢れていた。

きれいになつた砂浜をたくさんのお客さんが声を上げて楽しんでいる。

海は「ゴミ」も連れてくるが、母の思い出やおじいちゃんの憧れ、

僕の家族の幸せな時間も連れててくれる。

宿題が残つてゐる僕は、正直、それほど楽しらない。

でも弟や妹たちが楽しそうに海に入つてゐる姿を見ると、少しは良かつたなと思う。

中学校3年の夏、いつまで家族旅行ができるかはわからないが、「」の伊豆の海は嫌いではない。

また来年、今度は母の好きな夕日を僕も綺麗と感じることができただけ。

僕も少しは成長してるとと思う。

おじいちゃんのあこがれは将来、僕の憧れになるかもしない。

